保育と社会福祉を漫画で学ぶ

迫　共（比治山大学）

⑲　『母は汚屋敷住人』

掃除や片付けが得意な人もいれば、苦手な人もいます。筆者は片付けが苦手で、放っておくと部屋がものであふれかえります。本や服が大量にたまり、使わないのものなのに処分しようとすると、不思議な罪悪感が出てきて、全然はかどりません。

高嶋あがささんの『母は汚屋敷住人』（実業之日本社、2015）は、汚部屋どころか家や庭まで使わないものであふれさせてしまう母親との闘いを描いた実録エッセイ漫画です。

あがささんは弟と父親、母親の 4 人家族ですが、父親と弟は父親の実家に別居、あがささんも大学時代から会社員を経て漫画家になるまで別居していたようです。

漫画家は自宅での作業が長いもの。「実家に戻れば家賃負担が減る」と考えて、母親だけが暮らしていた「汚屋敷」での同居を自ら提案したのでした。実家を離れて数年が経ち、「時とともに母の片づけられなさを甘く見るようになっていた」と書かれています。「この選択が結果的に家賃よりも高いツケを払うことになるとは気づくはずもなく…」（pp.18-20）。

10 年ぶりに戻った実家には冷蔵庫が 4 つありました。大型 1 つ、中型 2 つ、小型 1 つ。大型と中型 1 つは壊れています。さらに庭先にも壊れた洗濯機が野ざらしに…。引っ越しサービスの不用品引き取りで冷蔵庫（中型とあがささんのもの）、洗濯機（壊れたものとあがささんのもの）を処分してもらうと、引っ越し代より処分費のほうが高額に。（略）実家のあらゆるものの寿命が過ぎていることに気づいたあがささん。「業者が通れるように廊下と玄関のゴミ、整理して捨てよう」と言うと、母親は「全部使うものだから、捨てる物なんて無い！」とものすごい剣幕で怒ったのです。（第 1 章「汚屋敷育ちの娘、実家に帰る」pp.24-36）

ゴミ屋敷の住人たちは、他人の目には必要のないもの、明らかにゴミでしかないようなものまでをもため込んでしまいます。そして家族や近所の人などが捨てようとすると激怒するのです。「全部使うものだ」「勝手にさわるな」と。一見、マニアックなコレクターのようですが、コレクターが愛好者たちの中で価値が認められたものを集め、たいていはきちんと整理して保管するのに対して、ゴミ屋敷の住人たちは、実際には価値がなさそうなものを集め、しかも整理ができないことが多いのです。

本人が「大事なもの」と呼ぶものの上にまた「大事なもの」が積み重ねられ、しだいに生活スペースが「大事なもの」で埋め尽くされます。本人の生活の妨げになったり、怪我や火災のもとになったりする場合もありますが、それでも「大事なもの」を捨てることに大きな抵抗があるようです。整理を薦めるとひとまずは頷くものの、右のものを左に動かすだけだったりします。

近年、この状態には「ホーディング障害（ためこみ症）」という名前がつけられました。2013 年の DSM-5（米国精神医学会による「精神障害の診断・統計マニュアル」）に初めて記載されました。

ホーディングの原因は様々あると考えられています。強い抑うつや不安感、ADHD や自閉スペクトラム症などの発達障害、認知症、強迫性障害、統合失調症などとの関連を指摘できる場合もあります。

研究者のスティケティーとフロスト（2007）の記述を筆者なりにまとめると、ホーディングに関連する要因として、①虐待や喪失体験をはじめとする「家庭環境や遺伝的要因」、②見えるところに置かれていないと認識できないなど、「情報処理の問題」、③ものに対して、自分のからだの一部のように感じるなどの「愛着の問題」、④ものが溜まっていることに安定感を感じ、処分することに拒否感をもつなどの「感情的反応」、⑤ホーディング行動を繰り返すことで自ら身につけた「問題のある学習」の 5 つがあげられます。

『母は汚屋敷住人』から 5 つの要因について考えてみましょう（あくまで作品中の描写をもとにしているので、断定的なことは言えませんが）。

あがささんの母親の「家庭環境や遺伝的要因」について、じつは実家にも新婚時代の家にも「お手伝いさん」がいたそうです。祖父が早く亡くなり、祖母が働いていました。しかし、同じ境遇の叔母はちゃんと家事ができるので、あがささんは「本人の資質だという結論」に至りました（pp.74-75）。

母親は階段に物を置く癖があります。それも段の端ではなく真ん中に。また押し入れの中身を捨てても、手前にダミーの荷物を置いておけば気づかないようです（pp.41-42、P.52）。こうした特徴から「情報処理の問題」は何らかありそうです。

あがささんが 10 年間ネズミにかじられ、糞まみれになった母親の靴を捨てると「直して使うんだよ！」とキレられます。他にも、捨てたはずの自宅のゴミを母親が持ち帰って散ら

かしなおし、「なんでお前は勝手に捨てるんだ！」と激怒する場面も描かれています(pp.80-81、pp.92-93)。

客観的にはゴミにしか見えないものでも、母親にとっては大事なものなのです。大事なものを勝手に捨てられると怒る、というのは理解できなくはありません。ただ、それはゴミであって使えないもの。何らかの「誤学習」が繰り返された結果、独特の認知と行動のパターンが出来上がっているようです。「愛着の問題」「感情的反応」「問題のある学習」についても絡み合っているように思えます。

片づけ始めて２年――トラック数台分は軽く捨てたと思います。腐った物、カビが生えた物、黄ばんだ物…しかし捨てる倍のスピードでゴミが増えます。この時、私はようやく気づいたのです。この人（母親）は片づけたくない人なのだと。（略）ありとあらゆる手を使いましたが、この人にとっては何十年分の物に囲まれることが「幸せ」なので、無駄なのです（第３章「片づけられない母 VS 片づけたい娘 決着!!」pp.94-96）。

あがささんが母親に対する認識を新たにした頃、母親は、あがささんの飼い猫にストレスをぶつけるようになります。それに耐えかねたあがささんは、父親と弟の住む家に、逃げるように引っ越しをします。「もし母が倒れて孤独死したらと一瞬頭をよぎりもしましたが、ここまできたら、母自らが招いた結果だと思うしかありません」(P.99)。

ゴミ屋敷の住人のゴミを整理しよう、捨てようとすると、かれらと戦うことになります。それが親であれば、子どもはいわゆる「毒親育ち」になってしまうこともあるでしょう。家族や身近な人の立場でかれらと戦うことは、心と身体の健康を損なう可能性があります。家族だから、近所の人が迷惑だからというのは大事な心がけではありますが、家族や身近な人だからこそ難しい問題があるように思います。

ホーディングへの介入は簡単ではありません。ゴミ屋敷の住人自身が、客観的な現在の状態を把握し、過去のトラウマや不安などの溜めこんでしまう要因を部分的にでも理解し、「もったいない」とか「もう少ししたら、あるいは自分一人で片づけられる」などの返答で自己防衛をしていることにゆっくりと向き合うことが必要です。そのためには、相談援助の専門家の介在が不可欠だろうと思われます。同時に、実際に仕分けを行い、整理、処分する行動の習慣化を学習する必要もあるでしょう。家族や身近な人には、溜めこむことを責めず、逆に、少しでも整理できたことを褒めていく心がけが求められます。

筆者自身も、書きながら自分の部屋の状態が気になってきました。「毎月○日は片付けを行う」などと決めておくとよいそうです。

紹介作品：

高嶋あがさ(2015)『母は汚屋敷住人』実業之日本社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献：

ゲイル・スティケティー、ランディ・O・フロスト（五十嵐透子訳　2013)『ホーディングへの適切な理解と対応　認知行動療法的アプローチ セラピストガイド/クライエントのためのワークブック』金子書房